

学友会東京支部だより

南 高

発行
所在

和歌山県立南部高等学校
学友会東京支部長
寺西 寛志
〒102-0076
東京都千代田区五番町2番地4
カサ・ド・タク 20A
(株)エヌ・サポート 内

第4回南高学友会東京支部総会開催



南高学友会東京支部の第4回総会は昨年10月31日(土)、品川プリンスホテルに於いて開催されました。総会出席者は50名。来賓として原田武俊学友会会長、母校からは澤竹孝幸校長および事務担当の渡口喜弘先生、大阪支部からは大野行男支部長および森下信夫事務局長にご出席いただきました。総会は議長に選任された寺西支部長の議事進行で始まり、議題の審議に先立って、故人となられた会員の方々の霊に参加者一同、黙祷を捧げました。議題の審議は、第3期(平成19年10月～21年9月)の活動報告・決算報告及び会則の変更、第4期の新役員体制・活動計画・予算計画についてであり、いずれも承認されました。

*(審議承認事項は3ページに掲載)

次いで原田会長と澤竹校長のご挨拶があり、澤竹校長から赴任当時のお話や南高の現状、今後の抱負等を聞かせていただきました。

総会に続いて開かれた懇親会は大野大阪支部長による乾杯のご発声で始まり、食事歓談の間には岡村茂子さん、池田素子さんによるピアノの演奏宮本昌子さんの独唱と、いつもながらの素晴らしい音楽を楽しませていただきました。さらに全員で宮本さんのリードによる童謡唱歌や青春歌謡の合唱があり、参加者のそれぞれがふる里への郷愁に浸っているようにみえました。

また、今回初めて実行されたカラオケタイムでは、歌自慢の面々が次々ステージに上がって雰囲気盛り上げ、空くじなしのビンゴゲームでは澤竹校長が司会者側に加わるなど、懇親会の楽しさがひと際ヒートアップしました。懇親会の締めくくりは、宮本昌子さんの指揮と岩田真澄さんのピアノ伴奏で懐かしい校歌を元気一杯に合唱し、次の再会を約して無事閉会となりました。



東京支部、7年目を迎えて

南校学友会東京支部長 寺西 寛志

学友会東京支部は昨年10月第4回定期総会を経て7年目を迎え、運営スタッフ一同の新体制がスタートしました。

支部長をお受けしてからの2年間、支部活動充実を目標に、賛助会員の定着と拡大を最重要ポイントとして努めてまいりました。スタッフ一同、日頃の活動を通して楽しい企画や情報を会員の皆様に提供できることを願って努めております。

幸い会員皆様のご協力により新たに10数名の方々が支部活動に参加されるようになりました。嬉しい限りです！ただ、その一方ではUターンでの帰郷や転勤・転居等で退会される方もいて、なかなか会員増加には結びつかない難しさを感じております。

役員においても、だんだんと高齢化が進んでいるのが現状で、支部運営も若い会員の方々に参加していただき、その力で組織の活性化を図る必要があります。フレッシュな運営アイデアを提供していただける元気な会員のご参加をお待ちしております。

若い会員の方は現在仕事盛りで多忙な毎日を送っておられることは重々承知していますが、総会開催直前を除くと、役員全員が一堂に会する会合は年に2～3度で、運営に参加されても貴重な時間を多く割いていただく必要はありません。

どうか今後は皆様も積極的に支部運営にご参画いただき、新鮮なご意見をお寄せくださいますようお願い申し上げます。また、現在は個人情報保護法の施行により在京卒業生の新しい情報把握が出来ず、新会員の獲得がだんだんと難しくなってきました。お知り合いの中に最近関東東地区に住居を移された南高卒業生がいらっしゃれば、事務局担当者にご紹介いただきますよう併せてお願い申し上げます。



学友会長挨拶

南校学友会会長 原田 武俊

東京支部の皆様方には、益々、ご健勝のこととお慶び申し上げます。この度は、会報の発行、その熱意溢れる活動に敬意を表します。

さて、私は南高第12期(昭和35年3月)の卒業で、平成21年3月の総会で山田五良会長の後任として、会長職を拝命致しました。南高等学校長退職後は山内の新福寺住職を努めて参りましたが、縁あって創立100周年実行委員長に就任し、第1回東京支部総会にも記念事業へのご支援を賜るべく出席させて頂きました。その際も多くの皆様方から数々のご厚情を賜り、厚くお礼申し上げます。

10月の支部総会にお招きいただいた際、「雲新しく・・・」と素晴らしい表情で熱唱される皆様の姿に接し、今も「南高で繋がっていらっしゃる皆様方に熱い思いがこみ上げてまいりました。

母校の教育環境は大きく変わりましたが、現在もグラウンド横の銀杏並木は当時の面影を残しております。記念事業で完成した「学友会館」には往年の写真を展示しています。ご帰郷の際には、是非お立ち寄りください。

昨今は教育を取り巻く環境も変化し、多方面で教育のあり方が問われています。他校同様、母校「南高」もそのまっただ中にあります。今後とも、母校南部高校発展のためご支援を賜りますようお願い申し上げます。

末筆ながら、東京支部の益々の隆盛を祈念申し上げます。



学友会支部総会に参加して

南部高等学校 校長 澤竹 孝幸

10月31日(土)品川プリンスホテルで行われました総会並びに懇親会に参加させていただきました。出席者の方々から、南部高校に対する熱い思いや又激励の言葉をいただき、本当に校長として任の重さを感じました。特に、出席者全員で「ふるさと」「高校三年生」「南部高校校歌」を合唱したとき、胸が熱くなりました。

私は、卒業式の言葉の中に「ふるさとを忘れないで欲しい」「母校は常にあなた達一人一人の心の中にあります」という話をします。東京支部総会に参加させていただき、先輩方の心の中にいつも母校に対する思いをもっていたいであることを改めて痛感する時間でありました。

母校はその時代とともに変わっていきませんが、先輩方が築いてこられた『南高魂』は、今後も学友会の皆さまの心の中に生き続けていくと思います。

私事で恐縮ですが、私は、平成22年3月末日をもって定年退職いたします。37年間の教員生活の中で、龍神分校勤務も含め、35年間南部高校での勤務でした。

私の心の中にも今新たな、『南高魂』が芽生えつつあります。

今後とも南部高校に温かいご支援をいただくとともに、皆さま方の益々のご健勝をお祈りしております。

今日も母校は元気です。



審議承認事項

1. 会則変更の件

第1章 第2条1～4の賛助会員資格条件規定に、5として「本条1～4に該当しない者にあっても、役員会の承認により、入会することが出来る」を追加した。

＊資格条件を緩和し、出来るだけ多くの方の加入を可能にした。

第2章 第5条5の会計担当2名を4の事務局に併合して、事務局を4名にした。

＊事務局担当者の業務負担の分散と、スタッフ間の意思疎通を密にする。



2. 第3期 (平成19年10月～21年9月) 決算報告書

(単位 円)

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	159,887	預り会費当期分振替	68,000
第3回総会費運営費	294,000	第3回総会費運営費	401,647
19年度賛助会費	226,000	役員会議費	106,868
20年度賛助会費	226,000	公報会議費	3,000
御祝儀、寄付他	174,000	会報発行費	157,500
会報広告費	80,000	事務用品費	71,575
次年度以後分会費預り	176,000	通信費	177,975
受取利息	133	雑費	14,750
雑収入		次年度繰越金	334,705
合 計	1,336,020	合 計	1,336,020

3. 第4期 (21年10月～23年9月) 予算書

(単位 円)

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	334,705	第4回総会運営費	500,000
第4回総会運営費	360,000	役員会議費	100,000
21年度賛助会費	110,000	公報会議費	50,000
22年度賛助会費	220,000	会報発行費	130,000
会報広告費	30,000	事務用品費	90,000
受取利息	100	通信費	90,000
雑収入		雑費	50,000
		次年度繰越金	44,805
合 計	1,054,805	合 計	1,054,805

＊前年度繰越金の中には、21年度賛助会費 114,000円 (57名分) が含まれています。

第四期 新役員紹介

よろしくお願
いたします



支部長	寺西寛志	昭三三年卒
副支部長	前田至美	昭二九年卒
同	山本甲男	昭三十年卒
同	石田明子	昭三二年卒
同	齋藤文子	昭四十年卒
顧問	柳本茂樹	昭二八年卒
同	浜田好通	昭二八年卒
同	林 忠雄	昭二八年卒
同	浜口忠英	昭二八年卒
事務局長	木村允彦	昭三八年卒
同	稲井清子	昭三八年卒
同	宮下典子	昭三八年卒
同	岩本喜直	昭三四年卒
幹事	宮本双葉	昭三十年卒
同	小西早苗	昭三四年卒
同	岩本佳子	昭三六年卒
同	堅田 仁	平 二 年 卒
会計	藤川安夫	昭四三年卒
同	三本陽子	昭四五年卒

城ヶ島 ハイキング

風薫る5月23日、好天に恵まれ11名の方々が参加してくれました。集合駅の三崎口からバスで約30分、城ヶ島大橋を渡って「白秋碑前」下車。

「白秋記念館」には昔懐かしい教科書なども展示されていましたが「利休ねずみ色」の物も展示されていました。

さしずめ、緑多き城ヶ島が雨にけぶると、千利休のお抹茶にねずみ色のベールがかかったような色になるらしい。この感性と表現力に流石「白秋！」と感心しました。浜に降りて帆型の詩碑の前で記念撮影、皆さんいい顔していましたよ。

色とりどり、大小様々の船が繫留されている漁港を見ながら城ヶ島灯台まで歩いて昼食会場へ。京急ホテルの定食は種類もいくつかありましたが、どれもお魚が新鮮で量も多く皆さん大満足でした。



お腹がふくらんだところで島の南側、城ヶ島ハイキングコースへ。

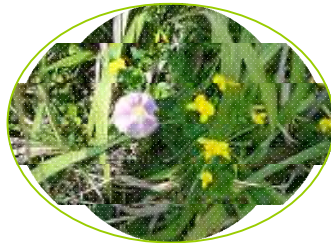
砂場あり荒々しい岩場あり、足元を気にしながらもおしゃべりは続きました。空を見上げると、トンビとラジコングライダーがゆっくりと同じ動きで大きく旋回していました。どちらがどちらを追いかけているのか・・・ 気持ち良さそうでした！



「馬の背洞門」

自然が作り出した芸術「馬の背洞門」を右手に見ながら登ると、背丈以上にうっそうと繁った小道に入る。うっすらと汗ばんでいた体が急にひんやりしてきた。ところどころ海岸線が見えて、途中の「ウミウ展望台」でウミウの生息地を見て城ヶ島公園に到着。

地元のボランティアガイドの説明付きで、展望台からはぐるり360度のパノラマ、紺色の海と青い空が眼下に広がり「地球はやっぱり丸い！」を実感できる水平線、遠く房総の山々までくっきりと見えました。



帰路は三崎港で途中下車して海産物のお買い物ツアーとなりました。買いたい人は大量に、買わないつもりの人までもドライアイスをつめてもらって、皆さん買い込みましたねえ～。(安い!) 一日中歩いて、歩いて、おしゃべりして、脚も口もお疲れ様でしたーと思ったのに、しゃべり足りないのか別れ難いのか、喫茶店に入り、小一時間過ごして予定より一時間も遅く、5時半解散となりました。

話している間にどこかで意外な“つながり”があることが分かってきて、故郷っていいですね～。だんだん広がりが見えてきて、世話人としては嬉しい限りです。次回の企画をお楽しみに!!



三崎港 海産物のお買い物ツアーへ

高校は私の青春時代

佐竹 ミツヨ(旧姓 中戸川)

(昭和 39 年卒 神奈川県相模原市 在住)

早いもので、卒業し上京して 50 年近い月日が経ってしまいました。年齢を重ねるにつれ、故郷が懐かしく思う日々が多くなってきています。そのようなときに学友会のことを知り、参加させていただき、先輩方・後輩達の話を知っていると、昔のことが少しずつ思い出されてきます。

昭和 38 年選抜高校野球で南部高校が甲子園に出場ということが決まったときはとても感激し、何か思い出に残ることをしておきたいと思っていました。ちょうど、応援団員を募集していたので応募して練習を重ね、甲子園に乗り込んでいった覚えがあります。そのときはとても練習に夢中になっていました。今、思い返すと、私の青春時代のような気がします。甲子園出場者がクラスに 3 人いたような気がします。

南部高校の生徒でいたことが自慢であり誇りに思います。ただ、夏の大会には、私の就職試験のため応援に行けなかったことが残念でした。これからも思い出を大切に、残りの人生を大事に過ごしていきたいと思っています。



高校の思い出



A組の思い出は

一生のかけがえのない宝物

中川 章夫

(昭和 35 年卒 神奈川県茅ヶ崎市 在住)

私は昭和 35 年の卒業ですが、南部高校に入学した当時の学科は、普通科・園芸科・農学科・家庭科でした。当時普通科は A 組・B 組の 2 クラスで、入学時に自分でどちらかを選んでクラスが決まったように思います。

私が選んだ普通科 A 組は、どちらかという就職コースで運動クラブ入部志向の者が多く、3 年生になったときは運動クラブのキャプテンが多く占めていました。小、中学のときは毎年クラス替えがありましたので、近所の友人を除けばなかなか親しい仲間ができにくい環境でしたが、高校ではクラス生徒 51 人が 3 年間変わらなかったため、多くの体験を一緒にできたということから、今でもそのクラスメンバーとの当時の出来事や楽しい思い出が多く走馬灯のように蘇ってきます。

クラス生徒のほとんどが卒業後は社会人への道を選んだことから、共通の経験を重ねてきましたので、時々みなべでクラス会を催しますが、再会すれば時の過ぎるのを忘れて旧交を温めあっています。この A 組での思い出は、私の中でも一生のかけがえのない宝物として永遠に心に宿っています。

高校生活での思い出のひとつに、体育祭でのクラス対抗「仮装行列コンクール」があります。これは各競技とは別のクラス競っての 1 大イベントでしたので、連日放課後にクラス生徒 51 人（男子 26 人・女子 26 人）が一丸となって道具作りに励んだことは懐かしい思い出であり、クラス員の絆を深めることができたかけがえのない行事であったと思います。因みに私たちのクラスは、東京オリンピックの開催が決まっていたことからテーマを「東京オリンピック」として入場行進を企画し、見事優勝しました。今のように何でも手に入る時代ではありませんでしたので、衣装や道具はすべて手作り、シュロの皮を剥いて茶色の髪に墨や絵の具で化粧し、世界各国の人々像を演出しました。また各運動クラブも活発で、毎年優秀な成績を収めており、私が所属した陸上競技部も駅伝競走では県下でいつもトップ争いをしました。

当時の大会コースは今のような舗装道は少なく、石ころゴロゴロ、車が走れば砂ぼこりモウモウの地道でした。毎日の練習も南部川・晩稲の農道や南部町・埴田の椿坂（国民宿舎あたり）を駆け巡りました。

当時この駅伝競走では、地元を駆け抜ける（白浜から南部折り返し田辺まで）「紀南駅伝」はなかなかの人気駅伝で、私も 2・3 年生のときには南部～田辺の区間を走りました。選手に、町中挙げての大声援をいただいたことは凄い力になり、毎年好成績を収めることができました。応援があと押しをしてくれたという表現がぴったりの駅伝だったと思います。みなべ町の父兄みなさんが、生徒・選手に自分の子供と同じように愛情を注いでくれていたことを今になって実感します。そして、そんな環境で高校生活を送れた幸せを思い、

「私のふるさと みなべ」をいつも誇りに思っています。





第 33 回 「正力松太郎」個人賞受賞

畑崎龍定師 (みなべ町堺の西山浄土宗万徳山常福寺住職)

昨年 5 月下旬、地元の知人から表題の記事が載った 1 枚の新聞切り抜きが送られてきました。以前から、「支部だより」掲載用に故郷の話題提供をお願いしていたことによるものですが、いまいし詳しい情報とを考えて数種の新聞資料を集めていただき、それらの記事を整理してみました。そこからピックアップしたものを「ふるさとからの便り」としてご紹介いたします。

この賞は主催：全国青少年教化協議会、後援：読売新聞社等の読売グループによるもので、仏教精神に基づき、長年にわたり青少年の育成教育活動で顕著な業績を挙げ、今後も活躍が期待される個人または団体に贈られる賞である。

畑崎師は、子供会活動や紙芝居を通じて 60 年以上の間教化活動に努めて来られたことが高く評価され、昨年度の個人部門受賞は、畑崎師がひとりであった。

活動のきっかけは、戦時に京都西山専門学校在学中、当時、隨身していた西山浄土宗の総本山光明寺で強制疎開をさせられていた小学生と一緒に生活し、親から離された子ども達に童話や紙芝居で元気づけ、励ました体験を通して、「これからの寺院における教化活動の第一は、青少年に仏教精神を身に付けさせることだと強く感じたことにあった」と語っている。

畑崎師は、昭和 22 年から常福寺の住職を務めるかたわら、南部小学校教諭として勤務し、その間、自坊には「はまゆう子供会」を開設し、県内外の寺院や地域の小学校・子供会等でも講演や口演童話・紙芝居の活動を続けてこられた。

これまでもその功績から平成 12 年の「*久留島武彦文化賞」をはじめ多くの賞を受け、現在、全国童話人協会副会長や西山浄土宗布教師として活躍し、今回の受賞にあたっては「これを励みとして仏教精神に基づき、青少年の育成と一般社会の情操教育振興に、なお一層精進したい」と熱く語っている。

私達の年代の多くは、幼少年時、畑崎先生の童話や紙芝居がなによりの楽しみであったことが、大変懐かしく思い出されます。

また、東京支部「南高」5 号でも、地元の堺に伝わる平家の落ち武者伝説から「鯉のぼりを立てぬ里」の由来話を紹介していただき、「ふるさとからの便り」として、このコーナーに掲載しました。

*久留島武彦 (1874-1960)：日本青少年文化センターや全国童話人協会の創立者で、「日本のアンデルセン」といわれている口演童話作家。



おたよりコーナ

「インド・トコトコ歩き旅行」

昭和 33 年卒 竹中 司郎(川崎市麻生区 在住)

昨年秋、10月下旬から一ヵ月間インドを旅行してきました。これまでにいろんな国を旅行しましたが、インドははじめてでした。

行きと帰りの航空券は予約しましたが、その他は宿も含めて長距離バスや列車は行き当たりばったりで決め、面白ければ何日もその街を歩き回り、そうでなければすぐ去るという旅行でした。それも 10 年前に四国 88 か所を歩いたときの菅笠をかぶっての一人旅でした。

ガンジス川の下流のコルカタから、沐浴や死体を焼く川バナラス、デリー、上流のヒマラヤの麓のヨーガのメッカ、リシュケーシュなどの北インド、それにインド亜大陸最南端の海の町カニヤークマリなどでした。

何千年も昔のインドがまだ生きているし、経済発展と貧しさが混在し、これが人間社会かと考え込まれることもあり、私の 70 年の人生がひっくり返されるような印象の深い旅でした。

その一つ、コルカタでのことです。

インドでも有数の人口の多い都市ですが、昔はカルカッタとよばれていましたが、今ではコルカタと呼びます。その街にキリスト教のマザー・テレサという人がヨーロッパからやって来て、貧しいインドの人たちを救ったという話を過去に聞いたことがありました。テレサは 1997 年に 87 歳で亡くなっていますが、彼女が作った教会「マザーハウス」は今もあることを知り、そこを訪ねてみることにしました。

今でもコルカタの街を歩くと、道端で家のない人が寝ていたり、食事したりしている人が多くいます。そんな人の中に、病気で骨と皮になって声も出ず死を待つ人もいます。

テレサは、らい病で死を待つそんな人を助けようとしてその人を抱き上げたとき「私はイエスのお身体に触れている。うれしい。」とほほえんだといわれます。その言葉を本で読んで私は感動しました。これこそキリスト教の真髄だ。ぜひそのハウスを訪ねてみようと思ったのです。彼女はそんな人を救うため、「死を待つ人の家」を作って何百人も介護をし死を看取ったり、捨てられた子ど

もを集めて育てる「孤児の家」を作ったりしました。

マザー・テレサの「死を待つ人の家」を 2 日ほど尋ね介護の様子を見せてもら



った後、「孤児の家」を訪ねた時のことです。「何か私にお手伝いできることはありませんか」と言って、私は「孤児の家」のビルに入りました。忙しそうにしていた係りのインド人の女性が「屋上で子どもたちの衣類を洗濯しています。それを手伝ってください」と言う。私は洗濯くらいなら何でもできる、と思い 3 階建てのビルの屋上に行くと、3 人ほどのインド人の女性と、韓国からボランティアできたという若い女性がいた。子どもの下着や服などが積み上げられてある。その数は、1000 枚はあろうか、これは大変な仕事だ。洗剤を衣類につけて足で踏んづけては洗い、それをすすぎ、絞って屋上のロープに干すのだ。私はしばって干す最後の作業を引き受けた。10 月末とはいえインドの太陽は私には暑い。午前中の 2、3 時間をかけてその仕事に専念しました。

一枚一枚干していると、韓国の女性がサポートしてくれた。それで「アー ユー コリアン？」と聞くと、そうだという。「アイ ノウ ユアー オールド カントリー ソング」と、またけしかけてみた。彼女は目をきらきらさせながら「何を知っているの？」という顔をしている。今流行の韓流の何か？と思っているようだ。それで私は「アーリラン アーリラン アラリヨ」と口ずさんだら、彼女はそれを大声で最初から歌い始めた。日韓の心が通じ合ったのだ。二人は片言の英語で話は盛り上がり、楽しかった。

実はこの「アリランの歌」は私がみなべ町で幼稚園に通っていた頃に知った歌だった。みなべ町には韓国人の住む一角があり、そこで遊んでいたとき、韓国人から聞いて覚えていたのだ。第二次世界大戦の頃の話である。あの人たちは今どうしているのだろうか・・・。

インドで、65 年ほど前の私の子ども時代のことが思い出され、懐かしく複雑な気持ちになった。

インドでの一ヶ月間、いろんなことがありました。混雑する街中でとっくみあいの大ゲンカする大人を見たり、私もお金の支払いのことで大ゲンカしたり、地獄を見るようなこともありました。

インドでのことをいっぱいメモしてきました。まとめて本にしたいと思っています。



「ガンジス川でのお祭り」

「私の趣味（その1、山歩き）」

私も昨年3月に還暦を迎えることとなった。仕事は大学卒業後就職し、還暦と同時に定年を迎えたがそのまま継続して勤務している。最近の趣味のひとつに山歩きがある。自宅は平塚市北部で、最寄り駅は小田急伊勢原駅で天気の良い休日は大山への参拝客や登山客でにぎわう。私が山歩きを始めたのは、5年程前55歳前後であったと思う。関東に来て20年以上になるが、近くに大山・丹沢がありながら、一度も山には登ろうとはしなかった。仕事が忙しかったことも理由かもしれないが、他にも趣味があり取り立てて山に興味はなかった。

山歩きは同郷の川口光雄君の影響が大きい。彼は営業活動のかたわら全国の著名な山々を登り、日本100名山はむろんわずか20年余で1800座も制覇したつわもので、一昨年丹沢山系最高峰蛭ヶ岳(1673m)と一緒に登った。昨年の夏には、富士山を強い風雨の中頂上付近をよつんばいになりながら、無事還暦登頂に成功した。一応の目標として健康が許せば70歳までは毎年登りたいと思っている。昨年には、彼から、「大山北尾根支尾根」の本をプレゼントされ、一冬に大山付近だけで10以上のルートを巡った。大山への登頂ルートは通常小田急伊勢原駅からバスでケーブル下まで行き、バス停からケーブルで下社まで行き更にそこから頂上に向かうルートと、日向薬師方面から見晴台を通過して上に向かうルート。秦野方面からは、ヤビツ峠方面～頂上に向かうイタツミ尾根ルートと、主にはこの3ルートがある。ところがこの北尾根、支尾根のルートを含めると一気にルートは10にも20にも増える。



「鈴木重雄先生が描かれた<日置の港>を訪れる」

高校時代、3年間美術部でお世話になった鈴木重雄先生の回顧展が3年前の1月下旬、南部・埴田の梅いちばん画廊で催され、たまたま帰省中で見ることができた。数十点展示された作品は浪・赤い松・水仙・雨の海・残花・梅の花・竹藪・雪の高野山・桃（絶筆）・菖蒲・アトリエの薔薇・たんぽぽ等々という題名で、描かれた場所が特定できる題名は少なかった。その中で「日置の港」(1964年)という題名の絵が展示されていた。この絵を見た時、この場所に行って先生の視点で眺めてみたいと思った。

その後何回か帰省するがなかなか訪れることができず、やっと昨年のお盆休みに念願の日置に向かうことができた。日置駅に降り、日置川を左手に見ながら土手沿いに歩いて下流の日置の町へ。空にはトンビが舞い、川では鵜が魚を追う。海からの風は暑さを忘れさせてくれて心地よい。思っていたより早くモチーフとなった「日置の港」を見つめることができた。船が係留されていないと通り過ぎてしまいそうな場所だった。-写真参照-絵の右奥の大きめの2隻の船は日置港に材木を運んでき

昭和42年卒 山崎 春樹（神奈川県平塚市 在住）

ふもとの方から頂上に向かう場合は、あまり道に迷うことはないが、頂上から尾根伝いに下ると迷うことが多い。山には小さなものを含めると尾根と沢が無数にあって、尾根を一つ間違えると全く違う方向に下りてしまうことが度々ある。尾根は基本的に木の根などが張っていて地盤がしっかりしているが、沢は地盤が弱く崩れやすいので、隣の尾根に行こうとしても沢を横切るとは危険を伴うことが多い。道に迷った場合は上の方に行くこと、最終的には頂上は一つなのだからと心がけている（これがなかなかできない）。大山頂上から延びる北尾根から西側斜面の主な支尾根の中腹には、ヤビツ峠方面から札掛方面にかけて9号鉄塔から18号鉄塔まで送電線を支える鉄塔が立っている。自然の中の鉄塔という人工物は無粋と思われるかも知れないが、山の木々にさえぎられて空しか見えない中で、上空に見える送電線や鉄塔は貴重な道しるべである。手前の鉄塔から隣の鉄塔まで、送電線の長さは500mの距離でも、歩いて鉄塔めぐりをすると、尾根の付け根まで上り返して次の尾根を降りなければいけないので、1時間以上かかることもざらである。ヤビツ峠近くの9号から札掛付近までの18号鉄塔まで1日で鉄塔巡りを計画したが、16号までで日が暮れてしまったこともある。この冬は東側斜面の尾根歩きをしようと思っている。



昭和38年卒 木村 允彦（埼玉県桶川市 在住）

たか、材木を積みきた小型貨物船ではないかと思われる。手前の小型漁船はエンジンをかけ出漁する寸前だから、描かれた時間は3時か4時を回った頃では…？ 川向こうの左側の黄土色で描かれている大きな構築物はセメント工場で作ったテトラポットか？ 海に沈める漁礁か？ 護岸工事等に使う物か？ 右側は神社の裏手になっていて大きな木が生い茂っている。遠くに霞む山。F3号(273×220mm)の小作品のキャンバスに描かれているとは思えない先生独特の色使いとタッチで力強く、大きく感じる絵だ。描かれた場所でしばし佇んで眺める。40数年前、この場所で黙々と描かれている今は亡き先生の姿を思い浮かべると胸に迫ってくるものがあつた。真夏の空は青く、風は頬を優しく撫で続ける。港を後にしたのは夕暮れ時だった。



「ふるさと」

いなか(旧南部町)を離れて39年。本当に早いもので、年齢も58を重ね、「あらしっくす」と周りから呼ばれる年代になってきました。入社後15年程は、大阪(伊丹空港)勤務であったことから、いなかにもちょくちょく帰ることができ、ふるさとを堪能できた時代でした。堪能できるといえば、僕の場合は、海釣り(磯釣り)です。釣りを始めたきっかけはと思い出してみると、確か小学5年生の時、友達と小目津(今は立派なホテルも建ち車で簡単に行けますが、当時は、山内から曲がりくねった山道を釣り竿かついで歩いて行ったものです)に釣りに行き、小さいながら結構魚が釣れて、それから釣りにはまった記憶があります。当時は、釣竿といっても今の様なカーボンの竿がある訳ではなく、なけなしの小遣いをはたいて買った竹の延竿でした。その延竿に自分でガイド・リールシートをつけ、釣りに行ったものです。決して立派なものではありませんでしたが、それはそれなりに嬉しいものでした。それ以来、鹿島・埴田・大目津・小目津と釣りを楽しみました。最近の思い出としては、2年前(当時は、大阪で勤務しておりました)の夏、長女家族とみなべに帰省し、孫と大目津、埴田の漁港で釣りを楽しんだこと。特に埴田の漁港の突堤ではチヌ・グレが釣れ、楽しいひと時を過ごすことができました。夕方、今にも沈みそうな伝馬船(失礼)で年配(おじいちゃん)の漁師さんが、ポンポンポンとエンジンの音を立てながら、刺し網を仕掛けに漁港を出て行く光景がたまらなく好きな夕暮れの情景です。サラリーマンの宿命とはいえ、現在は東京に住んでおり、残念ながら簡単にみなべで釣りというわけにはゆきません。

家は、高校のすぐ裏、徒歩1分の所にあり、小さい頃は高校で蚕を飼っていたような記憶があります。家の周りにも桑畑がたくさんあり、桑の実が熟す頃、桑の実

昭和45年卒 藤本 陽三 (東京都大田区 在住)

を食べ、口の周りを紫色にして家に帰り、よく母親に叱られました。その頃は、地域社会いうのでしょうか、隣近所がいろんな意味でつながっていました。今でもみなべ町では、そのような地域の繋がりがあるのでしょうか?あれば素晴らしいことだと思います。やはり、社会・家族は、おじいちゃん・おばあちゃんがいて、代々同じ屋根の下で生活するというのが原点だと思います。そのような社会であれば、昨今発生している悲惨な事件の多くが防げるのではないかと思う今日この頃です。核家族化が進んでいる現状では、なかなか厳しいものがあるのでしょうか……



入学当時(昭和42年)の南部高校は、普通科・園芸科・農業科・家政科・保育科の5つの学科があり、1学年500名位の正に「総合高校」だったと記憶しています。今はこのような学校は殆どないでしょう、本当にのどかでいい環境だったと思います。現在の校舎は当時と随分変わりましたが、脳裏にはその頃の校舎の風景が鮮明に残っています。校門の脇に学生が栽培した野菜が一盛り100円で売られていたりしたことも……

過去の感傷に浸ってばかりでは進歩ありませんがやはり「ふるさと」というものは、本当にいいものだをつくづく思います。先週の週末に姪っ子の結婚式で久しぶりに帰省しましたが、都会と違う空の青さ、海の輝きはやはり捨てがたいものです。



「小目津」からみなべの町を望む



「総会出欠はがきより」

- いつも学友会からのお知らせありがとうございます。私は80歳になり目も足も悪く出席させていただけず残念です。学友会の発展をお祈りいたします。
- いよいよ年金のみの独居老人生活に入ります。今回をもって退会させていただきたいと存じます。皆様お元気で活躍なさいますようお祈りいたしております。
- お世話様です。総会が盛大になごやかに進行されるよう、祈念申し上げます。(多数)
- ご無沙汰しております。南高の学友会は4年ぶり、皆様とお会いできることに楽しみにしています。役員の方々にはいつもお世話になっております。
- 4月19日入院して今に至っております。皆様によろしくお伝えくださいませ。
- 仕事の都合で休みが取れず参加できません。誠に申し訳ありません。
- 10月25日頃から1ヶ月、インド・スリランカにいきます。支部総会とぶつかって困りましたが、季節はその頃が良いので……。ガンジス川での沐浴、ヨーガ、南インドの素朴な世界のぶらつきです。一人旅。総会の件よろしく。
- 今年こそは皆様にお会いしようと思っておりましたが、都合がつかません。ご参会の皆様によろしくお伝えください。母校南部高校及び学友会東京支部の益々のご発展を祈念いたします。(多数)
- 主人の介護のため出席できません。
- 東京支部会は楽しみにしていましたが、運悪く中学生手芸講習会が……。残念ながら欠席させていただきます。
- 毎度、出席したいと思っていますが、仕事の関係上この時間では出席が困難です。せめて午後2時受付としていただければ出席できるかも知れません。
- ご苦勞様です。遅くなり申しわけございません。入院中のため参加できません。
- お世話様でございます。皆様にお会いするのを楽しみにしています。



第4回総会についてのアンケート 集計結果

アンケートのご協力ありがとうございました。集計結果は、下記の通りです。

同じ郷里の私たちが、互いに親睦を図り励まし合っていけるよう、皆様の貴重なご意見をこれからの総会や活動に活かしてまいりたいと思います。

○実施時期・曜日・時間等について

- ・この時期でよい。 ・お任せいたします。できれば土曜日がよい。
- ・土曜日の昼でよい。 ・ゆっくりできる日時でよかったです。 ・時期・曜日・時間現行通りがよい。

○総会・懇親会の内容について

- ・事務局の皆様のご苦勞ありがとうございます。内容は問題ない。 ・大きい広間で4時間もゆっくりできてすごいです。
- ・少々心細い思いで参加したのですが、やはり「みなべ」という懐かしい地を通じて皆様と交流できました。
- ・来賓の方々のユーモアなお話、田舎の言葉が懐かしく、故郷の思い出、高校時代の少女の頃が浮かびあがってきました。2年後はまた参加したく思っています。 ・会場の壇、一考の余地ないでしょうか？
- ・初めての参加でよい思い出となりました。次回同窓生を誘って盛り上げていこうと思っています。
- ・初めてのことで、良し悪しは私が点数を付けられる段階ではないが、懐かしい人々にお会いできて楽しく過ごさせて顶きました。

○食事・飲み物について

- ・よかった。 ・料理は量も多くてとても美味しかった。 ・大変よい。満足しました。
- ・おいしかったです。 ・おいしくいただきました。バラエティに富んだメニューで食べきれない位でした。
- ・食事はバイキングより、テーブルに出して頂けたらと思いました。
- ・食事がまいちです。会費1万円位でも良いと思います。

○感想 (どんなことでも結構です。お聞かせください。)

- ・今後とも長く続く学友会であってほしい。 ・もっと年代の若い方も出席してくださればよい。
- ・2年に一回故郷の方々と東京で親睦を図れるのはとても嬉しいです。 ・ビンゴは楽しかったです。合唱も楽しかった！
- ・初参加で懐かしい人々にお会いでき、楽しい時間でした。幹事の皆様ありがとうございました。
- ・♪「ふるさと」「赤とんぼ」他 校歌はやはり胸がジーンとして高校時代の楽しい思い出がよみがえって大変よかったです。ありがとうございました。幹事様及び関係者に感謝します。
- ・各地区の集い(ハイキングなど)を発展、拡大するのが賛助会員増の一助となるかも……。
- ・支部だより「南校」の内容について、いつも楽しくみえています。
- ・趣味を通じての交流が図ればより親睦が深まると思われます。趣味サークルへの参加希望アンケートをとってはどうか？ (例 ゴルフ・テニス・囲碁・マージャンなど)

ミニギャラリー



「江ノ島の海」



「新緑の裏磐梯」

今回のミニギャラリーは、石田明子さん(昭和31年卒)・田中修造さん(故人)の作品です。石田さんは現在も、魅力ある絵を描き続けていらっしゃいます。田中さんの絵は、一昨年 神奈川地区主催「江ノ島散策」のときにスケッチされたものです。

受章 おめでとうございます

宮本 双葉さん(昭30年卒) 千葉県四街道市在住

平成20年秋の叙勲で防衛省関係者として、瑞宝小綬章を受章されました。

この章は「国及び地方公共団体に対し功労があり、公務等に長年に亘り従事し、成績を挙げた者」に授与される勲章です。宮本氏は南部高校を卒業後、防衛大学から海上自衛官に進み、長年、国家防衛に従事し、海将補・調達実施本部長を務められた後に退官。現在は学友会東京支部の運営幹事をお引き受けくださり、多くのご協力とご指導をいただいております。紙面を借りてお祝いとお礼を申し上げます。

事務局から



ご寄付ありがとうございました



(H21.10.31 現在)

井上 マサ
田中 修造
岡村 茂子

山本 日出男
浜田 康敬
大原 弘子

小西 早苗
岩本 佳子
光明寺 東京別院(柴田 康英)

竹中 信夫
長岡 早苗

*敬称略



賛助会員新規入会

藤本 陽三 (昭45年卒)

藤原 節夫 (推薦会員)

*敬称略

訃報

昨年4月4日 南高学友会東京支部 前事務局長 田中修造さん(昭和34年卒)が永眠されました。南高学友会のために多大なお力を注いでくださいましたことに 心より感謝申し上げます。ここに 謹んでご冥福をお祈りいたします。



南高野球部創部 60 周年記念祝賀会

1月3日「南部高校硬式野球部創部 60 周年記念祝賀会」が紀州南部ロイヤルホテルで開催され、OB・歴代監督・野球部関係者ら 75 名が集いました。最初は大野行雄 OB 副会長の挨拶があり、ステージ正面の壁に今までの野球部の歴史や戦歴が投影され、全員で校歌を斉唱。

原田武俊 野球部後援会長・小谷芳正 みなべ町長の挨拶の後、「あこがれの OB からのメッセージ」と続き、元阪神タイガースの上田二郎さん・元近鉄バファローズの吹石徳一さん・ロサンゼルスオリンピックの金メダリスト吉田幸夫さん・現広島東洋カープコーチの植田幸弘さんが、それぞれ当時の思い出を語るコーナーでは、新チームの野球部員 24 名が目を輝かせて聞き入っていたのが印象的でした。



「当時の監督が選ぶベストナイン発表」では、アッと驚く打順や解説に会場がどよめき、盛り上がりました。歴代監督夫人・現監督夫人への感謝の花束贈呈もあり、畑崎周定 前南部高校校長が閉会の挨拶をされ祝賀会はお開きとなりました。

(文と写真 木村允彦)

編集後記



今年度も、会員の皆さまや編集スタッフの協力のもと、第7号を作成することができました。「この会報が皆さまに親しまれるものであってほしい!」「楽しみにしてもらえるものであってほしい!」と編集者一同、願いつつ……。

何と 嬉しいことに! 投稿してくださった方々がそれぞれに思いを込めて書いてくださいましたので、今回は2ページ増となりました。読み応えがありますよ。きっと皆さまをさまざまな世界に誘ってくれることでしょう。

なお、編集にあたっては、稲井・宮下・岩本・木村・林・齋藤が担当しました。今後とも会員の皆さまからの投稿や情報をお待ちしております。写真を添えてくださればなお有難いです。今年も学友会の皆さまとともに、元気で楽しくやっていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。



事務局スタッフ



宮下 典子(旧姓 西林) TEL・Fax 03-3986-3253
木村 允彦 TEL・Fax 0487-86-3514

稲井 清子(旧姓 真造) TEL・Fax 0467-58-3492
岩本 喜直 TEL049-251-1454 Fax049-252-4370